

アジア・太平洋研究センター主催, アジア学科共催講演会

日 時：2010年11月12日（金）

場 所：名古屋キャンパス L棟 L910 会議室

報告者：Dr. Khoo Boo Teik（邱武徳博士）（アジア経済研究所上席主任研究員）

テーマ：Malaysian Politics after the 2008 General Election: Changes and Prospects
（2008年選挙後のマレーシア政治：何が変ったか、今後どうなるか）

* 講演は英語



クー・ブーテック博士は、1994年から2009年までマレーシア・ペナンのマレーシア理科大学（Universiti Sains Malaysia. 本校の交換協定校）の社会科学部で教鞭をとり、2009年から乞われて千葉のアジア経済研究所で東南アジア研究の指揮をとっている著名な政治学者である。博士論文を基にした著書 *Paradoxes of Mahathirism: An Intellectual Biography of Mahathir Mohamad*（1995）は、23年間マレーシアに君臨したマハティール元首相研究の古典とされている。

マレーシアでは、2008年3月8日の総選挙（下院とほとんどの州議会の同日選挙）で、与党連合・国民戦線（Barisan Nasional. 統一マレー国民組織UMNO、マレーシア華人公会MCA、マレーシア・インド人会議MIC、サラワク統一保守原住民主党PBBなど14政党で構成）の下院議席が222議席中140議席にとどまり、69年以来初めて憲法改定に必要な3分の2を割り込んだ。それに対して新たに結成された野党連合・人民連盟（Pakatan Rakyat. 人民公正党PKR、全マレーシア・イスラム党PAS、民主行動党DAPで構成。この他、議席は得られなかったがインド人のMakkal Saktiも加盟）は選挙前の予想をはるかに上回る82議席を獲得した他、マレー半島部11州中5州（従来は2州のみ）で州政権を握った。この野党勢力大躍進

は、「ツナミ」と称された。クー博士は、この状況について、ここに至る背景、選挙後の展開、今後の展望について、広範な情報収集と深い理解、洞察に基づいて、丁寧にかつ分かりやすく解説してくれた。概要は以下のとおりである。

1. 2008年総選挙の結果。

2. 「ツナミ」の前に何が起きていたか。

- (1) 最大与党UMNO（マレー人政党）の専横とそれに伴う汚職・腐敗の蔓延。マレー人社会の亀裂と非マレー人の疎外感の深まり。
- (2) 同党委員長でもあるアブドゥラー・バダウィ（Abdullah Badawi）首相の指導力不足、マハティール元首相の執拗なアブドゥラー非難。
- (3) UMNOの司法への介入に対する法曹界の反発（2007年7月に弁護士会などが大規模デモ）。
- (4) 汚職撲滅、人権擁護、公正な選挙を求める各界の統一大集会（2007年10月）。
- (5) 権利を奪われ続けてきたインド人社会の反発。ヒンドゥー権利行動戦線（Hindraf）を結成し、2007年11月に大規模デモを行った。
- (6) 政府批判集会、デモはことごとく軍警によって鎮圧された。
- (7) 既存情報機関は依然として政府与党に支配されているが、インターネット上の政府批判が大きな影響を及ぼした。
- (8) 前回2004年総選挙には連立に失敗した野党勢力が、釈放されたアンワール元副首相（人民公正党の実質的党首）の下に連立樹立に成功した。

3. 選挙後の動き

連邦政府は、野党議員に脱党を働き掛けたり野党州政権に様々な圧力をかけたりしている。ペラ州ではその結果国民戦線政府が作られ、人民連盟政府と合法性争いが起きている。反政府言論に対する弾圧が強まった。

4. 今後の展望

UMNOは、マレー人の支持をつなぎとめるためにマレー至上主義の傾向を強めている。反対意見を封ずる国内治安法などの抑圧諸法も撤廃される気配はない。司法の独立も封じられたままである。マレー人優先の「新経済政策」がUMNOの一部特権層のみを潤す構造もそのままである。これを変えていくには、民衆の側から絶えず力を加え、野党勢力がこうした声を真摯に汲み上げてできるところから実行していくしかない。

講演の後の質疑応答では、アンワールはどのような改革を目指しているのか、“民衆のため”と言っているが、それは実現するか、旧来の支配勢力、新興改革勢力はそれぞれどのような層を代表しているか、といった質問が出された。上記の状況を変え

ようとしているが、目下、真に民衆に依拠してそれが実現できるか不明だ、「新経済政策」が生み出したマレー人資本家と民主化を求める種族を超えた勢力との対立だ、といった答えがあった。

クー博士は翌13日、大学院国際地域文化研究科主催で、大学院の学生を対象に、“Writing English-Language Articles for Refereed Journals”と題する講演を行った。
(文責：原不二夫)